

第51号 華山会報

令和5年11月11日

公益財団法人華山会

作品の「力」

板橋区立美術館学芸員 印田由貴子



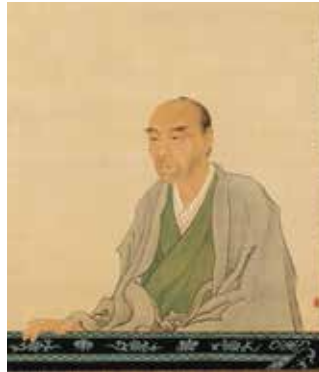
渡辺華山と弟子の椿椿山―二人のエピソードとそれを物語る作品はいつの時代も人々に感動を与える。このことを実感したのは、板橋区立美術館で二〇二三年三月に開催した「椿椿山展 軽妙淡麗な色彩と筆あと」でのことであった。展覧会のメインは椿山であったが、彼を語るには華山の存在を欠かすことができない。

「渡辺華山像」(田原市博物館所蔵) は、椿山の代表作の一つである。生前愛用した来客用の机に手を置く華山の姿は、日本の肖像画の中でも類を見ない。少し離れた場所から鑑賞すると、画面の枠から手が出ているようにも見え、まるで西洋の「だまし絵」のように、画面の中と外の境目が曖昧に感じられる。この作品は、華山の十三回忌のときに掛けられた。参列者の中には、華山と机越しに対面したことを思い出した人もいただろう。

さらに貴重なことに、画稿(下絵)も現存している。それも一枚や二枚ではなく、顔の部分だけを描いたものでも八枚は確認されている。ここまで画稿が残っている肖像画は珍しい。当初は華山の一周忌にあわせて制作する予定だったが、悲しみのあまり描くことができず、完成までに十二年もの歳月を要した。これらを見ると、輪郭線や目の形、陰影の付け方といった細かな点を何度も変更したことがわかり、椿山が苦心しながらも、懸命に描いた様子がひしひしと伝わってくる。

展覧会の会場には、華山像と画稿を一堂に並べ、華山から椿山へ宛てた遺書や、華山の没後にも渡辺家のことを案じる椿山の手紙なども展示した。圧巻の作品と師弟の強い絆を示す物語は、多くの来場者の胸を打った。なかには、作品を前に涙を流す人もいた。

映画館で泣く人を見かけることはあるが、美術の展覧会では多くないだろう。人の心を揺さぶり、涙を流すほどの感動を与える、ありきたりの言葉ではあるが、作品の「力」はすごいと感じた。現代では、インターネットによって作品を知ることが容易となり、美術書も入門編から専門的なものまで多く出版されている。華山像と画稿の一部は重要文化財に指定された著名な作品であり、既にさまざまな書籍に掲載されている。作品を「知る」だけであれば、画像を見るだけで十分かもしれない。しかし、作品を「体感する」ことは何にも代えがたい。何百年も後の時代を生きる人々を感動させるのは、作品の持つ力である。そして、それを受け取ることによって、私たちの心はより豊かになる。この体験は美術館や博物館などのミュージアムでしか得られないだろう。作品の「力」を目の当たりにして、歴史を紡ぐことの重要性を実感した。



田原藩義倉・報民倉

—民に報いたいと願った大名と華山—
研究会員 石川洋一

はじめに

○華山と義倉・報民倉

義倉とは、「凶年に窮民を救う目的で、平時に貧富の差に応じて穀物を徴収し、これを貯えておく倉」〔『広辞苑』〕である。田原藩では、十一代藩主三宅康直の治政、天保六年（一八三五）十一月報民倉と名付けられた義倉を竣工し、翌七年七月から運用を始めている。たまたま天保七年は記録的な天候不順であり、八月には大風雨高潮に襲われ、大凶作となったが、まさに時宜を得、報民倉の貯穀米は田原の人々を飢饉から救っている。その功績は、幕府から褒詞を授けられるほどのものであった。

報民倉設立についての功労者として、『田原町史』をはじめ関係するほとんどの書籍に華山の業績として紹介されている。しかし、華山は江戸詰の年寄（家老）であり、天保四

年春に田原に来遊したのを最後に蛮社の獄で捕らえられ、国元蟄居を命ぜられる天保十一年一月まで田原を訪れていない。報民倉建設で実際に汗を流した筆頭家老鈴木弥太夫、川澄又次郎、佐藤半助、年寄の次位で『御用方日記』を記した用人市川茂右衛門や八木八右衛門らの努力に触れられていない。

華山の業績として、「登は来るべき飢饉を見通して、領民救済に備える義倉「報民倉」の建設を藩主康直侯に願った」〔小澤耕一『華山渡辺登六四頁〕ことや「救荒施設としての報民倉の提言」が華山の「田原に残した功績の一つ」〔別所興一『渡辺華山』〕とされているが、華山の提案したことだから採用されたという面があるとしても、当時備荒貯蓄の重要性は誰もが強く認識していたこととであり、根拠が弱いと思われる。藩日記など藩の公式な文献から華山が義倉設立を進言したという記録は見つからない。当時の人々からすれば華山の報民倉設立における功績は、明瞭なことかもしれないが、今

日、史料からは華山女婿松岡次郎の『全楽堂記伝』に華山の進言があったという一文が残るのみである。華山の報民倉設立における役割を周辺史料から明らかにしていきたい。

○『田原町史』に見る報民倉の概要

報民倉という名称から何か新しい時代を切り開くような義倉という印象があるが、その建設・運用の実態はよく分からない。『田原町史』（中巻）から報民倉についての記事を見てみよう。

（前略）この年（天保六年）田原藩は諸国所領の飢饉襲来により、やがて来るべき凶作にそなえ、義倉の建設を企画した。そして九月十五日に城の東南外堀沿いに義倉建設の地鎮祭を行った。これより前から倉の名を「報民倉」と名付けられ、全く領民救済のための義倉であることが広く宣伝されていた。そのためか領民たちの建設意欲を鼓舞して、全部勤勞奉仕という好ましい体勢で進行したのであった。士、農、工、商、

目次

題字「華山会報」元華山会理事

故小澤耕一氏

P ① 作品の「力」 印田由貴子

P ② 田原藩義倉・報民倉①

石川洋一

P ③ 四州真景の旅⑬

中神昌秀

P ④ 令和5年度華山・史学研究
会研修視察

高根県津和野町・益田市を
訪ねて
柴田雅芳

P ⑤ 「偉人物語 渡辺華山」

読書感想文について

P ⑥ 華山会報索引

P ⑦ 公益財団法人華山会

田原市博物館からご案内

寺院、山伏、子供に至るまで奉仕を願ひ出る者が連日後を絶たなかった。城北の蔵王山より石や木材を切り出し運ぶ者、材を挽き竹を割る者、竹、縄、杉板、むしろなどを寄進する者、鋤鋤を取って労力を奉仕する者、無事落成を祈願する者、慰労の酒食を運び入れる者、など夜を日について奉仕作業が行われた。土台や塀に使用される山石は、十月十三日から二十七日間、荷車によって運ばれた。曳き子は家老、用人から前髪の子供まで加わった。十月十五日に地形水盛の見分がすみ、二十四日には土台ができ二十五日に初めての柱が立てられた。こうして十一月三日に上棟式を行い同二十二日には殆ど竣工した。上棟導師は長仙寺中興九世行篤法印が勤めて棟札を納めている。総日数は六十六日余、大工、左官、木挽ら二百二十六人工、人足三千百三十五人工、藩士足軽千二十九人工、寺院側三十六・五人工、百姓町人百七・五人工、計延人工四千五百三十四人。三間と十間よりなる一の御倉、二の御倉、二棟六十坪の報

民倉が外堀に影をうつして完成した。六十キログラムもあるケヤキの大額面には家老渡辺華山が藩主康直の代筆で「報民倉」の三大字を揮毫したといわれる。ついで藩士豪商らから続々と米穀が積み込まれ両倉には準備の米穀が充滿した（後略）（866頁〜867頁）。

物語風に記述されていて史料の裏付けは示されていないが、『田原町史』に見る報民倉設立の過程には、何か牧歌的な雰囲気を感じる。江戸後期とはいえ、厳密な身分制度の存在するときである。当時の時代背景から、一見してかなりユニークなやり方だったと思われる。特色を拾ってみよう。

藩士豪商から続々と米穀

財政難に苦しむ諸藩は、多くの場合藩士に引米と称して通常の米銭を与えなかった。富裕な豪商が義倉元米を納めるのは当然だが、自分たちの生活もままならない武士が領民のための義倉に元米を納めることは希有な例であろう。とりわけ田原藩は

文政十三年から天保五年まで上下一律二人扶持という厳しい儉約策を採った。天保六年秋に、「藩士豪商らから続々と米穀が積み込まれ」という事態は、中堅の武士には特に難儀なことであろう。

竹、縄、杉板、むしろなどを寄進する者、鋤鋤を取って労力を奉仕する者

城門や本丸など城の建築物普請では、領民はお役として、又日傭人夫として徴用・雇用されることはあっても、「奉仕を願ひ出て」普請に参加する例は希有であろう。報民倉は村々に置かれた義倉ではなく、桜門と成章館に隣接する藩公用の備荒貯蓄用倉庫である。ケースバイケースではあるが、藩が設ける建築物普請に「(労力) 奉仕を願ひ出る者が連日後を絶たない」こと、「竹、縄、杉板、むしろなどを寄進する者」がいることは特色ある事例であろう。

ケヤキの大額面

なお、義倉名を記した大きな扁額は、田原市博物館に展示されているが、大野藩備荒倉、石州浜田藩永康

倉、赤穂藩周急倉など江戸後期に設けられた義倉には大きな扁額が設けられていることが多い。米穀の貯蓄を第一の使命とするが、領民に恩顧感を与える政治的な意図もあると思われる。

一般的なやり方から逸脱しているともとれる報民倉設立の過程を、近世の備荒貯蓄策の全国的な視点からどのように位置づけられるか、検討したい。

○義倉の歴史と報民倉

律令制のころ行われていた義倉は、時代を経るにつれ行われなくなっていくが、備荒貯蓄は人々の生命維持にとって重要な課題であり、家族・村・支配者層それぞれに手立てを用いてきた。

戦国乱世の世を経て平和な世になった江戸時代、農民からの年貢収入を主な財源とする大名は、律儀に年貢を納める百姓に天候不順や災害など非常事態の際は領民の生命を守る責務があるとされるようになった。また、この頃、山崎闇斎によって、

宋の『朱子社倉法』が紹介された。社倉は村民が穀物を出し合って自主的に運用するもの、義倉は富裕者が拠出し公権力が管理するといわれるが、実際には区別されずに使われた。江戸時代最初の大飢饉といわれる寛永の飢饉は寛永十八年（一六四一）、翌十九年の二年続きの凶作により翌々二十年夏まで飢饉状態となったが、「諸国草臥候由候間、国本も仕置等能可申付旨」と家光から参勤在府の大名に帰国して窮民を救うことが命じられ、疲弊した農村を立て直すことは領主の義務とされた。さらに、「幕藩制イデオロギー」論による「委任」と「御救」の関係性からも、領主は御救を施し、安穩に治国することが、上位権力者将軍からの委任に應えることになる。

備荒貯穀の制を朱子の社倉法に基づいて明暦二年（一六五六）に実施した会津藩、ついで行われた寛文十一年（一六七一）の岡山藩の社倉はその実例である。山崎闇斎を招いた会津藩主保科正之の残した「家君十五条」の一つに「一、社倉ハ民ノ為ニ之ヲ置ク、永利ノ為ノ者也、歳饑ヘレバ即チ発出シテ之ヲ濟フベシ、之ヲ多用スベカラズ」とあり、社倉は民のために置き、飢饉の歳に発出せよ、他用は無用と命じている。正之の指示で会津藩は、藩庫からの資金で米七〇一五俵を買い上げ、代官に預け置き、二割の利息で貸し出すことを明暦元年の春から実施した。当時、一般的な借米の利息は三割から五割だったから二割はかなりの低利であった。社倉制度は、極貧の者への無償貸与や返済の猶予も規定されていたが、全体として困窮時に借り受ける村々や農民のたちの払う二割の利息で運用されていた（小池進『保科正之』吉川弘文館）。いわば藩財政に頼らない一種の基金・経済ファンド的な働きであった。岡山藩池田光政は、娘の湯沐料銀一〇〇〇貫目を借り受け、これを低利で貸し付けてその利息を救恤にあてた（倉地克直『池田光政』ミネルヴァ書房）。いずれの場合も藩主導による制度であった。幕領においても大坂城や特定大名城地に非常用の米穀を備蓄

した。しかし、十八世紀半ばに入ると領主は貨幣経済浸透などによる財政危機を抱え、十分な備荒貯穀ができなくなり、義倉・社倉の変質がみられるようになる。大友一雄氏は、すでに享保年間に大岡越前守支配下の代官が「百姓に作徳米の一部を救恤用に貯穀させ」、「村役人などを中心とする百姓間の相互扶助を説き郷村貯穀政策を導入」する動きがあったことを指摘し幕府の救恤政策の変化のきざしをとらえている（大友一雄「享保期郷村貯穀政策の成立過程」国史学118号）。

会津藩、岡山藩のような藩主導の社倉義倉は、しばらく行われなかったが、十八世紀後半財政難に苦しむ諸藩が藩政の回復を企図する中期藩政改革に取り組むなかで義倉・社倉の制度を取り上げている。多くは殖産興業や藩専売制など藩の経済的自立を目指した政策を採るが、一方で俸約、帰農奨励、農村取締り、義倉・社倉などを設け領民の保護、百姓成り立ちに務める。上杉鷹山の米沢藩をはじめ、広島藩、熊本藩、秋田藩、加賀藩など有力大名が続く。この頃の義倉社倉の貯穀は藩からの支出ではなく、百姓や町人の出穀、出銭が基本で領主もまた半分とか一部を負担するというものであった。天明二年（一七八二）から同七年にかけて特に奥羽・関東地方に大きな被害をもたらした、餓死と疾病の流行のため全国で九〇万以上の死者を出し、各地で打ちこわしが続出した。天明の飢饉である。江戸時代最も大きな悲惨な被害をもたらしたといわれる。天明の飢饉以来、幕府は貯穀政策を変えた。松平定信は寛政元年（一七八九）一月に幕領に貯穀と郷倉設置令を出した。それは組合村で郷倉を建て貯穀すること、幕府も三年間一定量の米や郷倉建築用材を下賜するといった内容であった。この施策は幕領のみならず藩領でも行われ全国的な動きとなった。いわば領主の責務としての備荒貯穀を領民自身に肩代わりさせるといえるものである。さらに、江戸市中対策として定信は七

分積金の制を導入した。町方全体の町入用総計から削減可能な分を見積もり、その七割を町人から上納させ、これを積み立て備荒貯穀としての困糶購入費や飢饉、疫病流行、大火、自然災害などでの困窮者の御救経費などに使った。

十九世紀に入ってから文化二年（一八〇五）福山藩福府義倉、同三年膳所藩安民倉、同六年姫路藩固寧倉をはじめ、文化十二年久保田藩感恩講、天保七年信州諏訪高島藩、同八年石州浜田藩永康倉、安政元年（一八五四）西尾藩など中小大名も義倉設立運営に関わっている。この頃になると藩が設けた義倉であつても、実際に貯穀米の抛出も、運用するのも村役人や豪農であり、窮民の打ちこわしを恐れる町人が中心となる場合が多い。田原藩で武士が貯穀米を献上するのは、希少な例であろう。

○田原藩の餓死の記録

渥美半島は温暖で深刻な飢饉とは縁遠いように思われるが、「田原町年表」に「餓死」の記録がある。

・延宝三年（一六七五）

昨冬より領内大飢饉、餓死者多数。

領内飢人二〇九六人に五五日分稗五

〇二俵六升を渡す。この代金一二五

両二分と一七〇文。

・正徳五年（一七一五）

凶年にて餓死人出る。飢人八六二人

へ三〇日分の救い稗四八俵二斗八升を給す。

○文政後期から天保前期の田原藩

文政十年（一八二七）第十代藩主三宅康明死去に伴い、弟友信が家督を継ぐと目されていたが、姫路藩酒井家からの養子の三宅康直が第十一代藩主に就任した。

文政十二年から天保三年の四年間に家老四人が長老から四十歳代前半の鈴木弥太夫、川澄又次郎、佐藤半助、渡辺華山に代わった。藩財政回復を目指し、「田原家中一律二人扶持」に代表される儉約策、人材登用にもつながる「格高分合の法」、大蔵永常を招いた殖産興業策、伊藤鳳山を招聘した風俗引き締め策、備荒貯蓄策などに務めた。田原藩の藩政

改革ともいえる動きの中のひとつが報民倉設立である。

一、報民倉設立の理念

○発議

藩日記に報民倉の文字が最初に見えるのは天保六年正月二十一日付のことである。

- 一、昨廿日御逢後御年寄番并重郎兵衛、村奉行、元々、二代官一同、御呼出被仰出候ハ、兼々義倉思召被為在候処、御勝手向々御六ヶ敷二付、御延引相成候処御手持格外之飢饉沙汰等有之ニをいてハ是非破レ」被成度思召候間、何レも得卜申談可申旨、御直達当月御月番委細右之趣被申達候。尤倉之名ハ報民倉とも被遊候方ニ哉と御沙汰有之。□□□□内密御沙汰之趣被仰出候。（『御用人方日記』）

月番の年寄（家老）、重郎兵衛、村奉行、元々、両代官が呼び出され、康直から義倉設立の沙汰を請ける。

兼々義倉設立を望んでいたが、勝手向きが難しく延引してきた。しかし想定外の飢饉の知らせが耳に入ったので是非とも実現したい。このことについてしっかり相談して欲しい。倉の名は報民倉とするという内容である。

義倉の設立には、村々の困窮を庄屋が代官に訴え、村奉行やその上位者である用人、家老が建議するとか、村々が騒々しいとか、現場の声から立案される場合が多いと思われるが、田原藩の場合藩主からのトップダウンである。このとき康直は義倉設立の具体案や思いをどのように伝えたかは分からない。内密に事を進めよとの仰せも、何か妙に思われるが、康直は翌二月二十五日に参勤発駕する。その思いは七月晦日付の江戸からの直書にかなり表出されている。次回読んでみよう。

参考文献

菊池勇夫『近世の飢饉』
吉川弘文館

『四州真景の旅』13

游絵図着色続編

研究会員

中神昌秀

一 序

『四州真景図』（重要文化財 個人蔵）は、文政八年（一八二五）夏、華山三三の歳、利根川下流域を旅行した時のスケッチ画入り紀行文です。この真景図は、田原蟄居中の天保十一年（一八四〇）に至り、着色され現在の色彩となり、さらに冊子装から卷子装に換装され現在の形になりました。

華山会報第四八号では、着色の背景となる蟄居中の作画について、また第五〇号では、蟄居中の游絵図着色について書きました。ところで、第五〇号の游絵図着色は、当初四ページの予定でしたが、続編を書き今回も探訪の旅を続けることとしました。

二 『四州真景図』と『游絵図』着色

田原蟄居中の華山日記である『守困日歴』の中に、「游絵図着色」という記載が出てきます。『游絵図』と『四州真景図』は同一のものであることは前回説明しました。ところで、天保一

年の「游絵図着色」が、どの程度行われたのかは不明ですが、着色されたこと自体は疑問の余地がありません。それにつけても、着色はどの程度されたのかは興味深いところです。

三 旅に絵具は持参していたのか

着色の議論の前提として、そもそも四州真景の旅に絵具は持っていたのでしょうか。この点については、参考となる記述があります。

天保二年（一八三一）、華山は藩命により、藩主の庶子 三宅友信（一八〇七〜一八八六）の生母を、里下りした相州厚木の早川村へ訪ねます。その紀行が『游相日記』です。

日記の原文、四行目から六行目に「買胡粉朱砂僅一銖訪太白堂主人長谷川氏」という記述があります。これは「胡粉と朱砂を買う、値段は僅か一銖であった、太白堂長谷川孤月氏を訪問した」という意味です。胡粉（ごふん）とは貝殻を焼いて粉碎したもので岩絵具の白色、朱砂（すさ）とは岩絵具の赤色のことです。この旅で、華山は麴町半蔵門外の藩邸を出発し、まず青山三筋町に住む俳諧の宗匠である太白堂六世長谷川孤月（一七八九〜一八七二）を訪問します。その道すがら、画材屋に寄り、旅行用に常備していた絵具の不足分を買足したと思われるます。画材屋の場所や店名は不明ですが、華山がいつも利用していた店ではないかと思えます。

四州真景の旅は、游相日記の六年前ですが、



四州真景図 二之巻四図「利刀 常州 十里」 紙本墨画淡彩 縦13.5×横40cm

四州真景の旅でも、胡粉と朱砂の外何色かの少量の絵具、膠（にかわ）液、絵皿、絵筆等の画材一式を携帯していたと推定できます。

なお、荷物は同行していた従僕が持ったはずですので、画材一式も当然従僕が持ったと思います。ただ、墨筆クローキ用（用）の矢立は、感動した風景を速写するため華山自身で持ち歩いたのではないのでしょうか。矢立は筆と墨壺を組み合わせたものが一般的ですが、絵画用に墨壺が独立し、墨が多めに入るタイプのものを使用していたかもしれません。

四 草の汁による着色

画材は携帯していたとは言うものの、岩絵具は使用するまでの準備に手間がかかる上に、旅程的にも着色をするような時間の余裕はあまりなかったはずで、初日も二日目もハードスケジュールであり、写生のための時間はあまりとれず、墨筆主体の写生に、菅沼貞三氏が『華山の研究』の中で、「淡薄の草の汁を彩した」と書いているように、着色は草の汁で薄い緑を着色したりする程度だったのではないかと想像されます。

草の汁は準備時間がかかるのではとも思われますが、リアル感が出るというメリットだけでなく、岩絵具を使うための準備に比較して、少ない時間で準備出来たという点も、草の汁利用の理由の一つではないでしょうか。そして、着

色は時間に余裕がある道中の宿等で行ったのではないのでしょうか。ただ、持参した絵具の色数、量も少なかつたので、着色は大きかりなものではなかつたと思います。

五 『游絵図』着色箇所私見

さて天保一年に行われた游絵図着色に関して、ここが着色してあるのではないかと思える箇所を、少しだけ書いてみます。まず、二之巻の三図、傑作「釜原」の着色についてです。草原の淡い緑は、華山会報第四七号『四州真景の旅』⑩名品「釜原」の中でも書いたように、一部は当初から草の汁による薄い着色がされていたようですが、後日着色した部分もあるかと思えます。中央の武士らしき人物の編笠の薄茶色や、武士の左の栗毛と青毛の馬、その他の小さく描かれた馬の色は蟄居中の着色かと思えます。また、画面奥の山や画面左の木々には、淡い緑の上に点や短い線で濃い緑が塗り重ねられています。これも蟄居中の着色かと思えます。

「釜原」の次の二之巻の四図、「利刀 常州 十里」の着色について、利根川に浮かぶ舟の薄茶色の着色、また常州の注記の下あたりの土手は、他より緑が濃くなっている、これらも後日、加筆したように思えます。藁葺屋根も当初は墨線のみで描かれていたものを着色したように思えます。画面左の家屋の奥の木々も後日の着色のように見えます。

三之巻の一図「潮来花柳」の着色についてです。

この図は建物主体の構図で、当初は建物の屋根や壁の輪郭だけが墨線で描かれていたのではないのでしょうか。個別に見ていくと、まず大門右の商家の茶色の屋根、大門すぐ左の二階建の建物の一階の屋根や壁、さらにその左の大きな茶屋の薄茶色の屋根と壁、左端の建物の屋根等は後日の着色と思われる。なお、建物の二階の窓辺に立つ、着物の女性の赤、大門の奥に連なる軒の赤い提灯などは、宿に戻ってから、携帯していた朱砂により赤色の着色をしたのではないのでしょうか。ただこの赤も、後日の可能性もあると思えます。

着色に関する私見を書きましたが、たとえば、この色は、後日の着色であるとか、この筆使いは後日のものだとか、後日の着色を判別する手法が確立され、着色の問題が解明されることを俟ちたいと思えます。

六 四州真景の旅の終わりに

平成二八年以来、『四州真景の旅』を続け、時空を彷徨いながら、知らぬ間に月日を重ねて来ましたが、今回の游絵図着色続編を一区切として、とりあえず旅を終えたいと思えます。読者の皆様、ありがとうございました。

令和5年度華山・史学研究会研修視察
島根県津和野町・益田市を訪ねて

左の写真は、益田市にある二つの雪舟庭園である。一つが、須弥山式欣求浄土を表した寺院様式庭園（時宗の萬福寺）。須弥山世界を象徴し、中心部の須弥山の下に心字池を配し、大小の石組みを配置している。もう一つが、蓬萊式楽土讃嘆を表した武家様式庭園（臨濟宗の醫光寺）。鶴池に亀島を浮かべ、左側の須弥山石から落ちる枯滝石組を配置している。それぞれがA・B



のどちらであるか考えていただけるとありがたい。

コロナ禍の影響で、三年間、愛知県か三重県内で行っていた視察であるが、規制緩和、さらに島根県益田市で企画展「没後一五〇年 山本栞谷と津和野藩の絵師たち」が開催されるといふことで、同展を目的に、本年度は、七月二十二日～二十四日に二泊三日で行った。

山本栞谷は、津和野藩出身の絵師で、藩の家老多胡逸齋に絵を学び、のち家老出府に従い、江戸に上り華山の門に入る。華山が蛮社の獄で捕えられると天保十一年に、椿椿山に入門する。嘉永六年津和野藩絵師になる。栞谷にちなみ、一日目は津和野泊とした。

新幹線を新大阪駅で「さくら」へ乗り換え、一路津和野へ。山陽新幹線といえば、こだま・ひかり・のぞみとばかり思っていた私にとり「さくら」の名前は初耳。しかし、「さくら」が鹿児島中央駅着と聞き、（桜島のさくらか。）と妙に納得。九州新幹線は、福岡で乗り換えなくてもよいことも初めて知った。まさに、華山が『駄舌或問』で述べた「時勢は、すなわち、今は古にあらず。故に古を以て今を議する者は、膠柱鼓琴、何ぞ解釈を待たん。」である。

途中、長時間の乗車の休憩も兼ね、広島県福山市で、福山城博物館を見学する。福山城博物館は昨年八月にリニューアルオープンした城の中の施設で、新幹線の車窓からも外観が眺められる。

福山駅から徒歩五分の所にあり、企画展「まといの色々」が二十日から始まったばかりだった。

福山藩は、幕末の老中阿部正弘を輩出した藩であり、展示も、正弘や初代藩主水野勝成が中心となっていた。歴史にイフはないが、正弘の表舞台への登場が数年早ければ、華山の悲劇的結末も変わったものになっただろうと思われるのではない。

その後、新幹線を新山口駅で、山口線に乗り換え、津和野へ向かう。やまあいをぬけ、津和野に近づくと、車窓からは、たくさんの赤鳥居が並ぶ美しい風景が目に入る。あとで、これが太鼓谷稲成神社であると知る。翌日、神社の人から「太鼓谷稲成神社は、京都の伏見稲荷大社から勧請を受け、津和野城の鬼門に創建される。藩主亀井家の祈願所として維持されていたため、廃藩までは、藩主以外の参拝は禁止されていた。『いなり』を『稲成』と表記する数少ない神社である。」と教えていただいた。

津和野は、山陰の小京都と呼ばれる城下町で、夏休みの初めということで混雑を予想していたが、案に相違し、人影はまばら、というよりほとんど見られない。新大阪駅での混雑を思い起こすと意外であった。

宿泊は、駅から徒歩五分ほどの所にある、のれん宿明月。門扉の施錠をかんぬきで行っている小京都に相応しい伝統を残した純和風旅館である。

この宿には、山本栞谷や華椿系の流れを引く松林桂月の作品が飾られていることを宿の人に教えられる。

翌日は、津和野市内の視察。明月のご厚意で、森鷗外記念館まで送っていただいたが、その時のご主人の言葉「森鷗外や西周先生」に、田原で「華山先生」と言うのと共通のニュアンスを感じた。事実、津和野では、若手研究者育成と支援を目的とした「西周賞」を設立し、西周に関わる学術論文を募集するという事業を展開している。

西周は、津和野藩藩医の家に生まれ藩校養老館で蘭学を修めたのち、幕府の蕃書調所で、洋学の教授、洋書や外交文書の翻訳にあたる。オランダに留学後、徳川慶喜の側近として、大政奉還後の国家プランである「議題草案」を提出する。哲学（西の訳語）や国際法をはじめとした西洋諸学の受容に寄与するとともに、維新後は、軍人勅諭の起草に関係する等、軍事制度の近代化に取り組んだ人物である。

最初の視察先は、森鷗外記念館と旧宅。

森鷗外は、ご存じ明治の文豪である。津和野で生まれ、十歳まで暮らした旧宅が史跡として残り、隣接した記念館では、軍医・文豪としての資料を映像や遺品、直筆原稿で紹介している。小憩ホールからは津和野川を隔てて津和野城跡の石垣を望むことができる。

次に津和野川を渡り、西周旧居を見学後、徒歩とリフトで津和野城跡へ向かう。出丸から津

和野の町並を見下ろした後、太鼓谷稲成神社を詣で、約千本あるという朱の鳥居を通って、殿町通りへ降りる。

その後、渡辺華山とも交流があった多胡逸斎の屋敷跡の一部である家老門、藩校養老館、郡庁跡、津和野町郷土館を見学する。町郷土館では、逸斎や山本栞谷の作品を見ることもできた。

どこも観光客が少なく、津和野としては大きな問題かもしれないが、ゆったりと散策することができてありがたかった。



多胡家門

この日は、益田泊のため、午後から益田へ向かう。島根県立美術館が六時まで開館していたので、三時過ぎに益田に着くと、その足で栞谷展へ。

展示は、天保年間から最晩年の栞谷の作品を年代と分野で五章に分けて構成され、六章として、津和野藩ゆかりの画家作品も展示されていた。田原市博物館からの出品も多く、華山筆の卓文君図と栞谷筆の卓文君図が展示されていた。二つの作品が並列展示されていないのが残念であった。

その日は、前日とは真逆のビジネスホテル泊。三日目は、雪舟関連の視察。雪舟は、文明十一年（一四七九）益田兼堯（ひさたか）に招かれて益田を訪れたと言われている。その時、築庭したとされる庭園が冒頭の写真で、Aが萬福寺の庭園、Bが醫光寺の庭園である。

二つの庭園の見学後、雪舟の郷記念館へ向かう。周辺は、益田の歴史文化ゾーン「雪舟山水郷」とされる雪舟の終焉の地一帯で、雪舟の死没地東光寺跡に建つ大喜庵（雪舟寺）、雪舟の銅像・墓、終焉地の碑などがある。晩年の雪舟が眺めた益田の町を眺め、帰路につく。

華山・椿山の弟子、山本栞谷にゆかりのあった地を訪ねての視察であったが、結果として、二つの鉄道・二人の旧居・二つの城・二つの卓文君図・二つの宿泊所・二つの庭園と、比べることの多かった視察であった。

研究会員 柴田雅芳

「偉人物語 渡辺華山」

読書感想文について

公益財団法人

華山会では、郷

土の偉人渡辺華

山先生の功績を

後世に伝承する

事業の一環とし

て、毎年市内小

学六年生に対し、「偉人物語 渡辺華山」の冊子

をプレゼントしてまいりました。感想文の募集

を行ったところ、二五〇点の応募をいただき、

最終選考において選ばれた二八点の中から最優

秀賞一点と優秀賞五点の作品をご紹介します。

ただきます。

応募いただきました学童の皆さんやご協力を

いただきました各学校の先生方に厚くお礼申し

上げます。

公益財団法人華山会事務局



あこがれの渡辺華山

童浦小学校 六年 渡 會 奏 宇

ずっと前に、中部小学校に遊びに行った時に渡辺華山の像を見ました。その時は、だれだろう、と思つて友達に聞いたたら

「華山先生だよ。」

と教えてくれました。その時にはへえ、としか思わなかつたけれど、六年生になって紙しばいで渡辺華山について読み聞かせしてもらつた時に、その時のことを思い出しました。そして、渡辺華山について

ぼくなりに考えてみました。華山はとても強い心をもっていました。今のぼくと同じくらいの十二才の時、殿様の行列にぶつかつてしまいました。その時は、名前を聞かれてもお父さんや殿様にめいわくがかかると考え、なぐられても名前を絶対に言いませんでした。痛いはずなのに、がまんをしていました。そしてその時に、殿様を教える先生になりました。と志を立てました。自分が決めたことをやりぬくために、少しの時間を見つけて勉強をがんばる華山は、とてもかっこいいなと思ひました。ぼくは、後でいいか、とやることを後回しにしてしまうことがよくあります。その結果、寝るのがおそくなつたり注意されたりして、もつと早くやればよかったと思ひます。強い心をもつことは難しいけど、まずはやるべきことをきちんとできるようにしたいです。

華山が家老になり、田原藩のためにたくさんのごとをしました。その中で、一番心に残つたことは「報

民倉」を作つて田原藩の人々の命を救つたことです。気候が不安定で、米や野菜が採れなくて日本中が困つていました。だから華山は心配して、「報民倉」を作りたいと、殿様にお願ひしました。そして、華山は絵を売つて真つ先に十俵の米を寄付しました。その翌年、実際に大ききさんが起こりました。その時、華山は「凶荒心得書」を書いていました。華山は農民や町民によつて国が成り立つていくという進んだ考えのもと、細かく具体的なききん対策が書いてありました。身分の高い人、低い人が力を合わせたので、田原藩では一人の死者も出ませんでした。農民などを大切にするといい考えがみんなの命を救つたのだと思ひます。先のことを見通せる華山だからこそ、田原藩を救うことができたのだと思ひます。

華山は最後まで自分のことよりも周りのことを考え、支え続けました。最後は自刃という悲しい結末になつてしまひましたが、華山に助けられた人は数えきれないくらいと思ひます。だから、華山の功績や思ひを忘れないために華山像があるのかなと思ひました。

ぼくは、足の病気になる、今は大好きな野球ができません。みんなが試合で活やくする姿を見るとうらやましくなります。でも、声を出しベンチを盛り上げたりコーチャーをしたり自分にできることを考えています。華山のようにあきらめない強い心を持つて、また野球ができるように努力をしていきたいと思ひます。



優秀賞

華山のようになれるように

童浦小学校 六年 光 本 隆 心

渡辺華山という名前を、僕は聞いたことはありません。なんとなく、田原の偉い人なんだろうなと思っていました。授業で偉人物語の話を聞いて、どんな人なのかもっとくわしく知りたくまりました。

偉人物語を読み終わって、日本を変えようと一生懸命力を尽くした人が、田原のためにも力を尽くしてくれていたということを知って、僕の住む町にそんなにもすごい人がいたということをうれしく思いました。

僕が一番に残っているのは、報民倉というお倉を建て、日本中で飢餓が起こっていたにもかかわらず、田原では一人も餓死する人を出さなかったということです。そのころの日本は、長い間政治が乱れていて、おまけに気候が不安定なため、米や野菜が採れなくなっていました。心配した華山は、いざというときのために食料を貯めておくことを考えました。そして、倉には人々のために食料を貯め、華山は自分がかいた絵を売って米十俵を寄付しました。田原が大飢饉になったとき、華山は江戸から帰ることができませんでした。飢饉の時には殿様や役人たちはどうしなければならぬか、その心構えを細かく「凶荒心得書」に書いて用人に持たせて田原へ行かせます。細かく具体的に、何をすべきか丁寧で説明され、よく行き届いた指示のおかげで、田原藩ではみんなが力を合わせ、飢え死にする人が一人も出ませんでした。人が困っているときには自分

のこのように同情し、自分よりも他の人のことを大事に考えられるところが本当にすごいと思いました。そして、先のことを見越して行動できたからこそ、田原の人々を救うことができたのだと思います。

紀州の商船の荷物を「拾い得」をした罪を解決したときも、新田開発を幕府の役人が進めようとしたのを止めたときも、助郷の命令を食い止めたときも、村人たちからのお礼のお金を決して受け取ろうとしませんでした。いつも、そのお金を村人たちが困ったときに使えるように返すのです。いつも領民のことを大切にし、正しい人の道に外れたことは決してしない華山のことを、僕は本当にすごい人だと思います。

華山は絵も上手で、忙しい中でも絵の勉強に励み、どんなときにも小さな手帳を懐に入れていて、絵がかきたくなったらすぐにかけるようにしていました。親に少しでも楽をしてもらいたかったのでも、収入が高い画家になろうと決心しました。それは出来ないままでしたが、華山は家族や他の人のことを一番に考えて、それを行動に移せるという、僕にはできないことがたくさんありました。僕は少しでも華山のように他の人のことを考えて行動できる人になりたいなと思いました。最後の最後まで家族のことを思って生きていた華山のように家族や友達を大切にしたいです。そして、好きなことでも努力をすることは大切なことなんだと、この話を読んで深くそう感じました。

「渡辺華山」から学ぶこと

高松小学校 六年 鈴 木 竜 誠

ぼくが初めて「渡辺華山」の名前を知ったのは、

保育園のころです。母の実家へのおみやげはいつも決まっていた、相模原の祖父は包み紙を見ると、「お、これは渡辺華山の絵だな。」と言います。それを聞いて、華山って絵を描く人なんだなと思っていました。

六年生になって、本を読んで、華山が画家だけでなく、家老としても立派な人だったことを知りました。でも、華山は最期に切腹をしています。どうして切腹したのかがぎもんに思いました。

本を読むだけでなく、池ノ原公園や博物館に行つて調べると、切腹した理由が少しずつ分かってきました。江戸の終わりがら外国から船がやって来て、開国するようにせまりましたが、幕府は鎖国を続けようとした。華山は、新しい考えの人たちと、話し合つて、これからは、外国とつき合つていかなければならないと考えます。『慎機論』を書いてつかまつてしまいました。華山がなくなつて明治になると、日本は開国しているので、華山の考えは正しいことがわかります。華山の考えが進み過ぎていたために追いつめられて切腹したと思いました。次に、華山がどうしてそんなに進んだ意見を持つことができたのか考えました。

華山はいつも自分のことよりも人のことを大切にしていました。報民倉がその一つです。皆さんにそなえて、穀物を少しずつでも貯蔵しようと考え、絵を売って手にした米十俵を真っ先に寄付しました。報民倉のおかげで田原藩では一人も餓死者がいませんでした。華山は『一人でも餓え死にする者があつたら、それは殿様の大きな罪であります。』と、うったえました。これは、自分の差はあつても人間はみな平等という考えから来たものだと思います。華山は村人を大事にしていました。貧乏な家に育つたので、つらさが理解できたのです。華山に助けられた村人たちがお礼にお金を持って来て、受け

取らずに、『困った時に使ってください。』と返したこともその一つです。

村人を大切に思う気持ちは、家族を大切に思う気持ちと同じです。お父さんが病気で働けないので、華山は八才のころから働いていました。絵を習ったのも、立派な画家になって家を助けるためでした。それでも、弟や妹が六人もいたので、寺に出したり女中に出したりしました。家族と別れるのは、悲しかったにちがいありません。しかし、つらいことや苦しいことに負けずに、ふるい立ったから画家や家老として、偉人と呼ばれるような人になれたのだと思います。家族を思い、田原藩を思い、国のことを思った結果、開国という考えになったのでしょうか。

華山の最期の場所、幽居の家に行きました。まわりが木におおわれて、セミの音がしていました。まだ華山のたましいがここにおいて、田原を見守っているように感じました。

華山先生が教えてくれたこと

中山小学校 六年 小川 桜里奈

私はこの本を読んで渡辺華山のことをたくさん知ることができました。

私は今までこの渡辺華山は、名前を聞いたことがあるくらいしか知らなくて、学校でこの渡辺華山の本がくばられたときは初めてのことを知れるワクワクがとてもありました。

そしてこの本を読んで華山先生について二つのことを知ることができました。

一つ目は、華山先生はとても努力家だということです。幼いころから、とても勉強熱心だったそうです。そのおかげで知識もあり、絵の才能ももっていたのに、でも努力をやめず続けた華山先生をとて

尊敬します。

私は勉強でも、習っている英語やバレエでも少し練習したり、上手くできたりしたら、これだけでできれば十分、と自己満足してしまいます。でも、華山先生のようにずっと上を向き続ければ、何事も上手くいくということを知ることができました。

私も華山先生のように努力をあきらめず、何事もがんばっていきたいです。

二つ目は、華山先生はとても強く思いやりのある人ということです。華山先生は私と同じ十二才の時、兄妹とはなればなれになってしまうのです。それでも華山先生は弱音を吐かず、しっかりと前を向くのです。私なら、妹とはなれてしまい、さらには生活も厳しければきつと、何もかもがいやになってしまうと思います。でも華山先生はどんなにつらくて、悲しいことがあってもけつして弱音は吐かなかつたのです。とても強い人だなと思いました。また、華山先生はとても思いやりもあります。自分の悲しいことよりも相手の気持ちをだれよりも考え、よりそえる人です。みんなのために報民倉を建てたことになによりも感動しました。「みんなのためならなんでもする。」そんな思いがこの華山先生の言葉から伝わってくるような気がしました。

このような華山先生を見て、自分の生活を振り返ってみました。私は自分の楽しさや満足度だけを求めていて、あまり周りのことは気にしてなかったと思います。自分をふりかえった後も華山先生の言動を見てみると、改めて華山先生のすごさを知りました。私も華山先生みたいに周りのことをよく考えて行動したいです。

このように華山先生はすばらしい人だということがよく分かります。

そして華山先生は日本の未来のことも考え、「慎機論」を書いたそうです。それなのに華山先生は幕

府によって厳しい処罰を受けてしまいます。そして、殿様に迷わくがかかると思い、自ら命を絶つのです。最後まで国のことを考えたとてもすばらしい人だと思います。

今の田原は華山先生のおかげであるといってもおかしくありません。たくさんさんの農作物やきれいな海もあり、とても平和です。そして、私はこの田原が大好きです。

これからも華山先生の守ってくれた田原を大事にし、次は私達が守っていききたいです。

偉人物語渡辺華山を読んで

亀山小学校 六年 橋本 愛友美

偉人物語渡辺華山を読んで、感動したことが二つあります。

一つ目は、華山先生の名言で「大功は緩にあり、機会は急にあり」です。この意味は、大きな功績はゆっくり積み上げてゆくものだが、チャンスは急にくることを忘れるなどという意味です。この名言を読んで、私の学校生活や普段の生活と結びつくことが書いてあると思いました。

それは、四年生のときから続けている陸上クラブのことです。私は、長距りは得意で短距りは苦手です。でも、ラストスパートがきくようになるからと、百メートルやリレーの練習も続けていました。そのおかげか、五年生のときは、Bチームですが、県大会で二位をとれ、六年生ではAチームの補欠に入ることができました。補欠ではあるけれど、チームでは、県の一位をとることができ、全国大会に出場するチャンスをもることができました。苦手だったけれど、続けてきてよかったし、速く走れるようになったことや、全国大会を経験できることは、私に

とつて大きなこ積です。

二つ目は、「見よや春 大地も亨す 地虫さへ」という俳句です。これは、小さな虫でも春が来ればかたい大地を突き抜くように、努力を続けなければいづか自分たちにも希望のかなう日が来るはずだという意味です。この意味を知って、私は一つ目で感動した名言と同じように、努力を続けることの大切さがよりいっそう心にひびきました。学校生活でも全校の前で話すことになったとき、私は伝えたいことは心の中にあるのに、うまく言葉に出せなかつたり、きん張して頭の中が真っ白になりあせつてしまつたりすることがあります。そのような経験が何度かあつたけど、担任の先生にも

「自信をもつて話せばいいよ。わからないときは聞いていいんだよ。」

と言つてもらえて、先生に話すときから少しずつ慣れていけるように、自分の気持ちがあまく伝わるようにがんばつてみようと思ひました。

華山先生からは、希望や目標をもつて努力を続けることの大切さを教わりました。これからも学校生活や陸上のことにも限らず、いろんなことに挑戦し、得意なことや苦手なことにも少しずつ努力を続けていきたいです。

忠誠！渡辺華山

田原東部小学校 六年 福田 碧

時は幕末動乱。黒船来港から始まつた激動の時代を生きた田原藩の家老であり、画家、蘭学者でもある渡辺華山。彼は、学問を重んじ、慈悲の心を持つた忠臣だったが、最後に罪人として、自らの殿のために腹を切つた。

華山の半生には、貧しくても人のために働く賢明

なところがよく出ていた。画家としても人間としても勉強と信頼が、後に生かされていくものだと感じた。実際に、華山の絵には、学んできた絵の技術が見てとれる。

田原藩にその能力を買われ、重要役職についたころ、黒船が浦賀に来港し、事が大きくなつてきていた。ちょうど西洋の絵について勉強していた華山の耳に入らぬわけもなく、次第に華山は外国事情に興味を示すようになっていった。華山の絵は、西洋の絵で学んだ技術、光と影を使った少し洋画に近い形の絵を描いている。こういつたところからでも、華山の新しく良いものはどんどん取り入れ、自分らしく変えることができる才能がうかがえる。

華山が今までに描いてきた数ある肖像画の中でも、「鷹見泉石像」という現在、国宝になつていて絵を描いている。この絵はすばらしく顔と服との線の使い分けなどによつて繊細さが強調され、泉石の姿がより浮かび上がつてくるようになっていっている。華山の積み重ねてきた技術には圧倒されてしまう。

華山が家老になつた頃、紀州藩とのめごとを最小限にとどめたり、天保の大飢饉の際に、あらかじめ蓄えられていた報民倉の食料を分け与えたりしている。農民のために様々な事をしていた時期であり、農民たちからとても慕われていた。華山はとても慈悲深く、優しいおらかな心の持ち主という想像ができる。

国全体が荒れていた時に、華山は蘭学を学んでいた高野長英らとともに、これからの日本という一つの国がどうすればよいのかについて書いている。藩という小さなものについて考えることしかできない人が多かった当時に、国全体について考えていたということに、ただただ感心させられた。

しかし、蛮社の獄が始まると、華山は幕府批判の罪で投獄させられてしまう。幕府は無能だとしたか

らだ。この時代、国を治める幕府を批判すると罰せられてしまう。今の時代では考えられないことである。

華山は牢から出られても苦しい生活は続き、殿の悪い噂が自分のせいであると知ると自刃した。何という義の男なのだろう。自分の死をもかえりみず、忠誠をなしたのだ。

今回、渡辺華山を詳しく知り、田原の地にこんなすばらしい人がいたということが誇りしかつた。渡辺華山という人は、学者としての考え、画家としての才、そして、人としての慈悲深い心を持ち合わせていた人だと思ふ。どんな時でも先を見通し行動した渡辺華山。そんな彼を見習ひ、思いやりと先見の目を持つた生き方をしていきたい。

入選

- | | | |
|-------|-------|-------|
| 片岡あお | 大木希乃花 | 小川心温 |
| 藏井菜々美 | 藤城瑛朱 | 伊藤里桜 |
| 北村篤仁 | 長濱綺流 | 福井由梨香 |
| 朝倉志絆 | 小川偉央 | 河合太牙 |
| 小松奏斗 | 伊奈 秀 | 根木光希 |
| 大場心美 | 杉本亜緒 | 河合姫彩 |
| 小久保僚朗 | 鈴木暖乃 | 井本拓夢 |
| 小久保実咲 | | |

(受賞された方は除く)



華山会報索引

本索引は第四十一号（平成30年）より第五十号（令和5年）に掲載された内容を収録しました。

◆特集記事◆

◆博物館所蔵品から◆

第四十一号 『少年物語 渡辺華山』読書感想文について 八頁

第四十九号 渡辺華山筆『客坐掌記（天保九年）』⑭十頁

華山会報索引 十四頁

第四十二号 ドナルド・キーン名誉館長の思い出…

鈴木利昌 二頁

第四十三号 『少年物語 渡辺華山』読書感想文について 十二頁

第四十一号 『全楽堂記伝』（二）―華山伝記の根底テキ

第四十五号 『少年物語 渡辺華山』読書感想文について 十二頁

スト―…別所興一 二頁

第四十六号 『第9回華山会学童書道展』入賞作品のお知

渡辺華山『毛武游記』⑱…加藤克己 四頁

第四十七号 『少年物語 渡辺華山』読書感想文について 五頁

渡辺華山『毛武游記』⑲…加藤克己 八頁

第四十八号 『第10回華山会学童書道展』入賞作品のお知

『全楽堂記伝』（二）―華山伝記の根底テキ

らせ 九頁

スト―…別所興一 二頁

号外 渡辺華山没後一八〇年記念事業を開催

渡辺華山『毛武游記』⑳…加藤克己 六頁

第四十九号 田原市博物館の30年…増山禎之

『全楽堂記伝』（四）―華山伝記の根底テキ

『少年物語 渡辺華山』読書感想文について 十二頁

スト―…別所興一 二頁

第五十号 『第11回華山会学童書道展』入賞作品のお知

渡辺華山『毛武游記』㉑…加藤克己 六頁

らせ 十三頁

◆巻頭言◆

◆資料紹介◆

第四十一号 私なるものをめぐって…佐藤康宏 一頁

第四十二号 華山の「死」と「義」…杉本欣久 一頁

第四十三号 華山が眺めた渡良瀬川と田中正造…末武さとみ 一頁

第四十四号 渡辺華山に憧れた鈴木鷺湖…伊藤紫織 一頁

第四十五号 「厚木六勝」と渡辺華山…山岡裕子 一頁

第四十六号 椿椿山筆「日光道中真景図巻」随想…本田諭 一頁

第四十七号 秋葉街道が結んだ画系…楨村洋介 一頁

第四十八号 手書き文字 今むかし…笠嶋忠幸 一頁

第四十九号 売立目録を繕いてみよう―未知の美術品との出会い…須藤茂樹 一頁

第五十号 華山と京博…福士雄也 一頁

スト―…別所興一

二頁

第四十六号

『訪舘録』の写本「南葵文庫本」と書筆者源義珍について…中村正子

八頁

第四十三号

公益財団法人華山会・田原市博物館・渥美郷土資料館からのご案内

十六頁

スト―…別所興一

二頁

第四十九号

『全楽堂記伝』(八)―華山伝記の根底テキ

二頁

第四十四号

公益財団法人華山会・田原市博物館からのご案内

十六頁

スト―…別所興一

二頁

第五十号

『全楽堂記伝』(九)―華山伝記の根底テキ

二頁

第四十五号

公益財団法人華山会・田原市博物館・渥美郷土資料館からのご案内

十六頁

スト―…別所興一

二頁

第四十七号

四州真景の旅⑩名品「釜原」…中神昌秀

十四頁

第四十七号

公益財団法人華山会・田原市博物館からのご案内

十六頁

スト―…別所興一

二頁

第四十八号

手控冊『辛巳画稿』『壬午図稿』『癸未画稿』に見られる依頼画について…中村正子

六頁

第四十七号

公益財団法人華山会・田原市博物館からのご案内

十六頁

◆会員から◆

第四十一号

四州真景の旅④旅先で訪ねた人物 大里庄治郎(続編)…中神昌秀

八頁

第四十八号

研修視察「愛知県内の歴史遺産をめぐる」…小川金一

十四頁

第四十八号

田原市博物館展覧会のご案内・(公財)華山会から

十六頁

第四十二号

研修視察「高野長英の生誕地―水沢・花巻の旅」鈴木利昌

五頁

第五十号

渡辺華山とプラグマティズム…大崎洋

六頁

第四十九号

公益財団法人華山会・田原市博物館からのご案内

十六頁

四州真景の旅⑤旅先で訪ねた人物 久保木清淵…中神昌秀

十二頁

第五十号

四州真景の旅⑫游総図着色…中神昌秀

九頁

第五十号

公益財団法人華山会・田原市博物館からのご案内

十六頁

第四十三号

四州真景の旅⑥旅先で訪ねた人物 久保木清淵 続編…中神昌秀

十頁

第四十一号

研修視察「三重県松阪市を訪ねて」…鈴木利昌

十四頁

第四十二号

公益財団法人華山会・田原市博物館からのご案内

十六頁

第四十四号

四州真景の旅⑦名品「潮来花柳」…中神昌秀

十頁

第四十一号

公益財団法人華山会・田原市博物館・渥美郷土資料館からのご案内

十六頁

第四十二号

公益財団法人華山会・田原市博物館からのご案内

十六頁

研修視察「足利の華山の足跡をたどる」…鈴木利昌

十四頁

第四十一号

公益財団法人華山会・田原市博物館・渥美郷土資料館からのご案内

十六頁

第四十二号

公益財団法人華山会・田原市博物館からのご案内

十六頁

第四十五号

四州真景の旅⑧名品「利刀」常州…中神昌秀

十頁

第四十二号

公益財団法人華山会・田原市博物館からのご案内

十六頁

◆田原市博物館からのご案内◆

華山会報は四月と十一月に発行されます。華山会報のバックナンバーをご希望の方は、華山会館、田原市博物館にお申し出ください。田原市博物館ホームページ (<http://www.kazankai.jp>) からご覧いただけます。

公益財団法人華山会

田原市博物館 からのご案内

田原市博物館展覧会のご案内

十二月三日(日)

田原市制二十周年・博物館開館三十年・
渡辺華山生誕三三〇年記念特別展

ドナルド・キーンと渡辺華山―華山の叢智にふれて―

(企画・特別展示室)

ドナルド・キーン(一九二二〜二〇一九)は日本文化研究の第一人者であり、田原市博物館名誉館長を務めました。著作には、渡辺華山について書かれたものもあり、『渡辺華山』



城宝寺華山墓所を参拝するドナルド・キーン氏(2017年10月撮影)

(新潮社、二〇〇七年)や華山会報十五号(二〇〇七年)などがあります。

田原市制二十周年を記念する本展では、キーンの足跡やその功績、キーンが高く評価する華山作品、キーンと田原との関係など多彩な資料で辿ります。

十二月九日(土)〜令和六年二月四日(日)

言祝ぎの美術―新年を祝う

(特別展示室)

「言祝ぎ(ことほぎ)」とは、言葉で祝うことを意味します。生活のなかで祝いの言葉は欠かせません。言葉からあらわされたものは、やがて絵画化、意匠化され、美術品として現在に伝わっています。本展では、新年を祝うおめでたい作品をご紹介します。



野口幽谷「海鶴蟠桃」

二月十日(土)〜四月七日(日)

ひな人形と初凧展(企画展示室一)

田原の旧家に伝わったひな人形や田原凧保存会制作の初凧を展示。

同時開催：巻物―横長の書物―

巻物は古くから記録媒体として利用されてきました。横に広げると、巻物は実はとても長く、普段はほんの一部しか展示できません。本展では長大な横長の書画をお楽しみください。

観覧料

特別展 ドナルド・キーンと渡辺華山

一般 七〇〇円(五六〇円)

小中学生 三五〇円(二八〇円)

田原市在住・在学・在勤の方は、観覧

無料

特別展以外

一般 三〇〇円(二四〇円)

小中学生 一五〇円(一二〇円)

()内は二十人以上の団体料金

東三河在住の小中学生はほの国

こどもパスポートをご利用ください

(呈示により無料入館)。

休館

毎週月曜日(祝日の場合はその翌

平日)、展示替日、十二月二十八日、

一月四日

(公財)華山会から

講座「渡辺華山を知るために」

毎月十一日午前九時から

華山・史学研究会会員募集中

毎月第四土曜日研究会

視察研修(年一回)に参加できます。

渡辺華山史跡巡りガイド養成講座

毎月一回程度

申込場所 華山会館事務室

華山会報 第五十一号

令和五年十一月十一日発行

編集発行 公益財団法人華山会

理事長 鈴木 愿

常務理事 林 勇夫

事務局長 大根義久

〒四四一―三四二一

愛知県田原市田原町巴江二二の一

TEL 〇五三一・二二・一七〇〇

FAX 〇五三一・二二・一七〇一

編集協力

田原市博物館

華山・史学研究会

会長 小林一弘

※華山会報ご希望の方は華山会館・田原市博物館にお申し出ください。次回発行予定 令和六年四月十一日